

第 2 章

呉市の概要

～呉市をいろいろな視点から見てみよう～

自然的・地理的環境

- ・ 呉市は、内陸部と瀬戸内海に面する沿岸部・島しょ部で構成されています。
- ・ 市域全体を通じて平たん地が少なく、標高 300～800m の山が連なっています。山と海の風光明媚な自然に囲まれ、瀬戸内の多島美や多彩な峡谷美の景観があります。
- ・ 温暖で多照少雨の瀬戸内海式気候で、年間を通じて暮らしやすい環境です。

社会的状況

- ・ 人口は平成 17（2005）年をピークに減少が続き、令和 6（2024）年は 203,549 人です。
- ・ 観光客数は 300 万人台を維持してきました。呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）には多くの観光客が訪れており、他施設・他地区への波及効果が期待されます。
- ・ 臨海部は瀬戸内の重要な工業地帯となっています。海域は広島県内有数の好漁場に恵まれ、多様な漁船漁業が営まれ、静穏な内湾域を中心に牡蠣などの養殖業が行われています。
- ・ 風水害や地震等により多くの被害を受けてきました。平成 30 年 7 月豪雨では、土砂災害が発生し、道路や鉄道の寸断など大きな被害がありました。

歴史的背景

- ・ 縄文時代には、内陸部や沿岸部で暮らしが営まれるようになり、人々が定着します。
- ・ 古代より沿岸部、島しょ部は海民の生活の舞台であり、航海安全を祈る祭祀遺跡や製塩土器も発見されています。
- ・ 鎌倉後期より海賊衆の動きが活発となり、呉衆・多賀谷氏・能美氏は、「三ヶ島衆」と称し、大内水軍の中核として活躍しました。
- ・ 近世には海運が活性化し、三之瀬、御手洗などの港町が発展しました。また、沿岸部や内陸部では新開築調が行われ、安定的な農業が発展しました。
- ・ 明治 22（1889）年、呉鎮守府が開庁し、鎮守府と海軍工廠を一体とする海軍の一大拠点地となりました。
- ・ 第二次世界大戦後海軍は解体され、旧呉や広の海軍工廠跡地には多くの造船や鉄鋼などの企業が進出しました。戦後の呉市の産業においては、海軍の熟練工の技術が活かされています。

地区の特徴

- ・ 呉市は合併の経緯もあり、多様な地域性を有した地区が集まっています。それぞれの地区で住民主体のまちづくり計画を作成し、地域性を活かした取組が行われています。

1 自然的・地理的環境

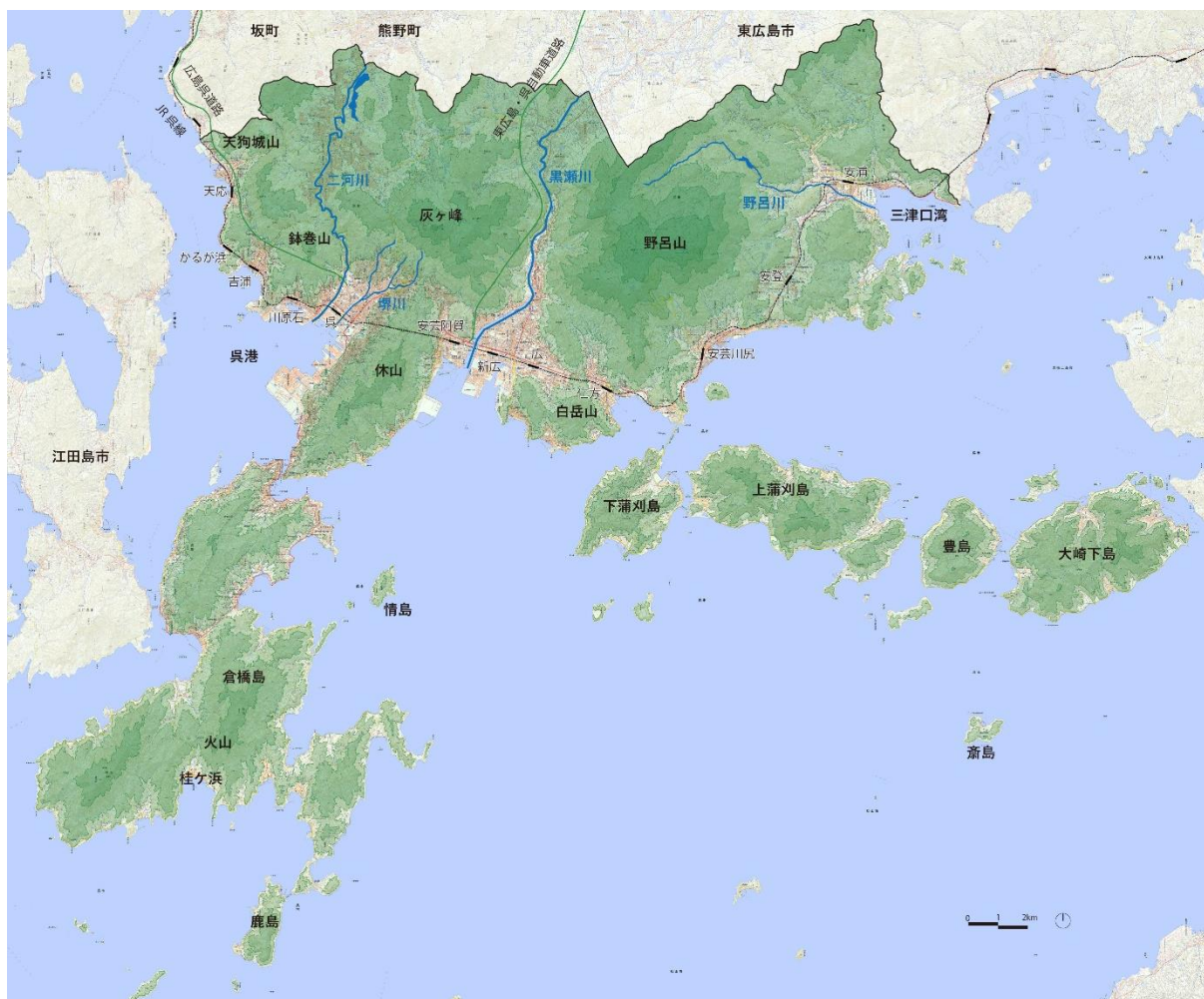
(1) 位置・面積

呉市は、瀬戸内海のほぼ中央部、広島県の南西部に位置し、瀬戸内海に面する内陸部と沿岸部、倉橋島や安芸灘諸島などの島しょ部で構成されています。

面積は352.83km²で、内陸部と沿岸部、島しょ部（倉橋島、鹿島、下蒲刈島、上蒲刈島、豊島及び大崎下島）は、架橋により陸続きとなっています。また、市域は東西方向に38.1km、南北方向に33.1kmと広がっており、約300kmの海岸線を有しています。



呉市の位置図



市域の概要



灰ヶ峰からみた呉市の景色

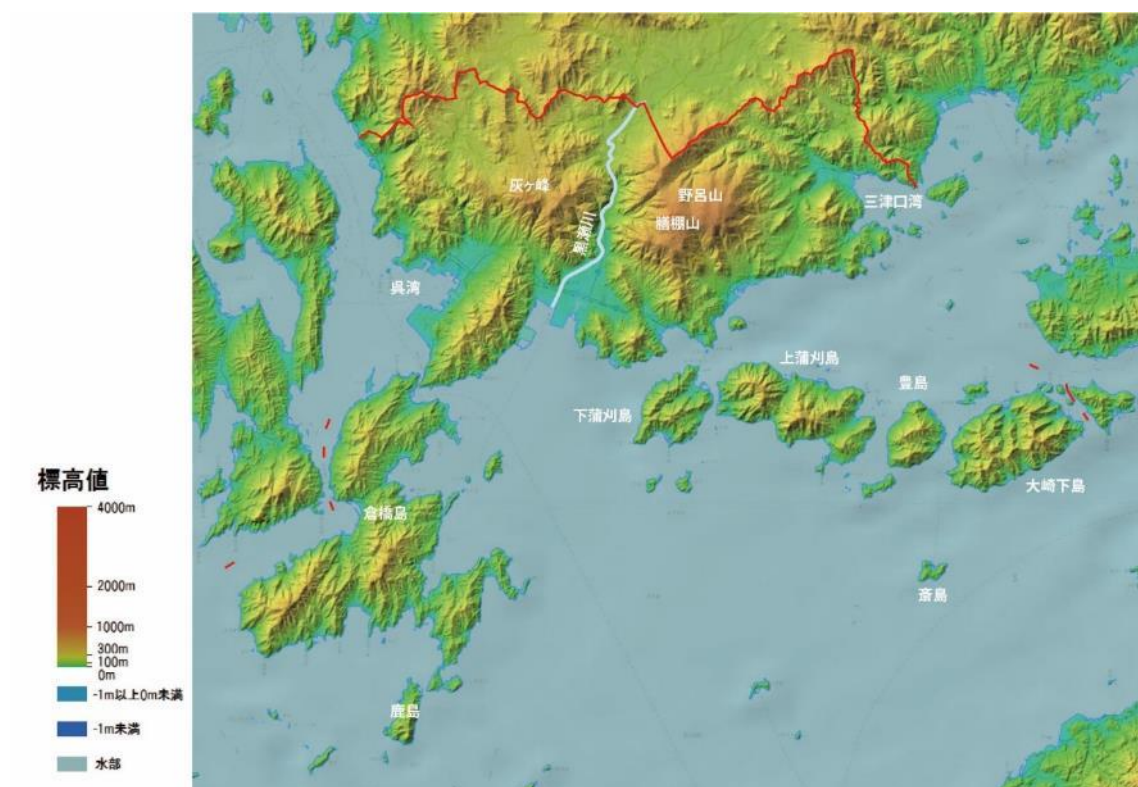
(2) 地形

市域全体で平たん地が少なく、標高 300 ～800 m前後の山が連なり、市内のそれぞれの地域を分断するような地形となっています。こうした地形から山と海の風光明媚な自然に恵まれ、瀬戸内の多島美や多彩な峡谷美の景観となっています。

市域の南は瀬戸内海に臨み、島、岬、湾入、河川、平地、山地など複雑な地形をしています。内陸部及び沿岸部は、東から野呂山 (839m)、白岳山 (358m)、灰ヶ峰 (737m)、休山 (500m)、鉢巻山 (399m)、天狗城山 (292m) などの山々によって、各地区に細分されています。これら山々の山ろくの小規模な扇状地に市街地が形成されています。

この狭あいな平たん地を貫流する主要河川は東から野呂川、黒瀬川、堺川、二河川であり、急こう配の溪谷となっており、川幅も狭く、非常に短いものとなっています。特に中央地区は、三方が山に囲まれたすりばち状となっており、平たん地が極めて狭小であるため、住宅地は山の麓から中腹へと広がっています。

また、倉橋島、下蒲刈島、上蒲刈島、豊島、大崎下島など安芸灘諸島を市域に含みます。



呉市の標高（国土地理院電子地図国土 Web より）

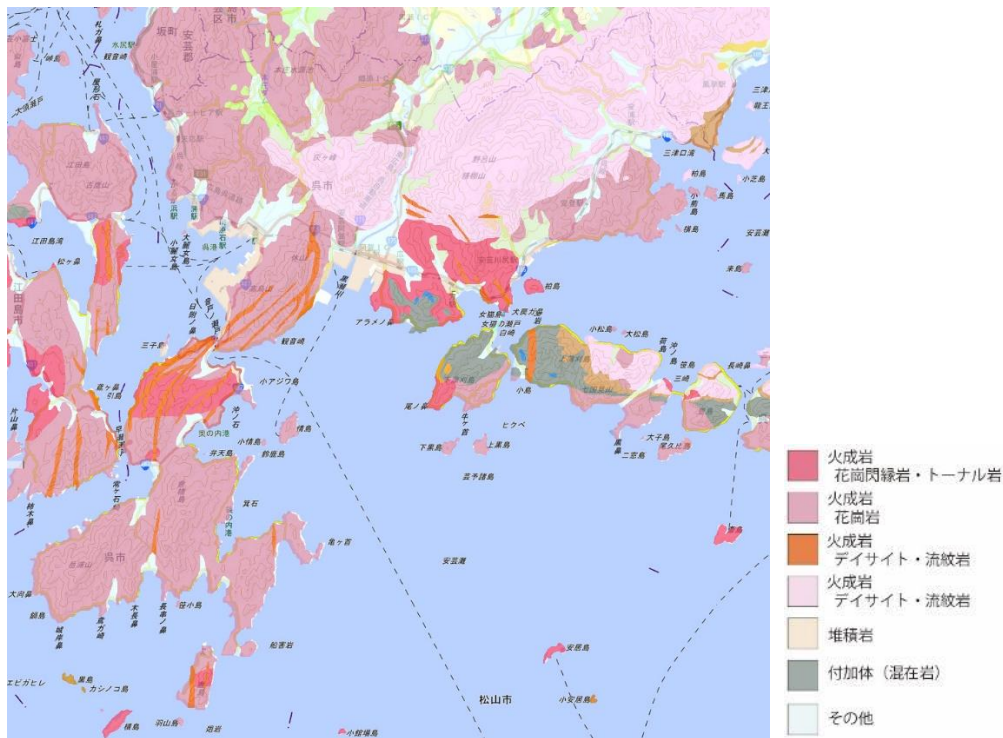


野呂山・ハチマキ展望台からの眺望

（3）地質

地質は、灰ヶ峰～野呂山にかけて一部が緻密な流紋岩系統であることを除き、そのほとんどが花崗岩系統であり、低地は沖積土によって覆われています。花崗岩系統のものは、容易に風化し、崩壊しやすいという特徴があります。この二系統によって林相ははっきりと異なり、花崗岩地帯のほとんどは生育不良の林とシダ類でやせた土地が多いですが、流紋岩地帯は、かん木草類または良く生育した針葉樹林です。なお、昭和 20（1945）年 9 月及び昭和 42（1967）年 7 月の大水害による山崩れ及びがけ崩れを調査した結果、そのほとんどが花崗岩地帯で発生したことがわかっています。

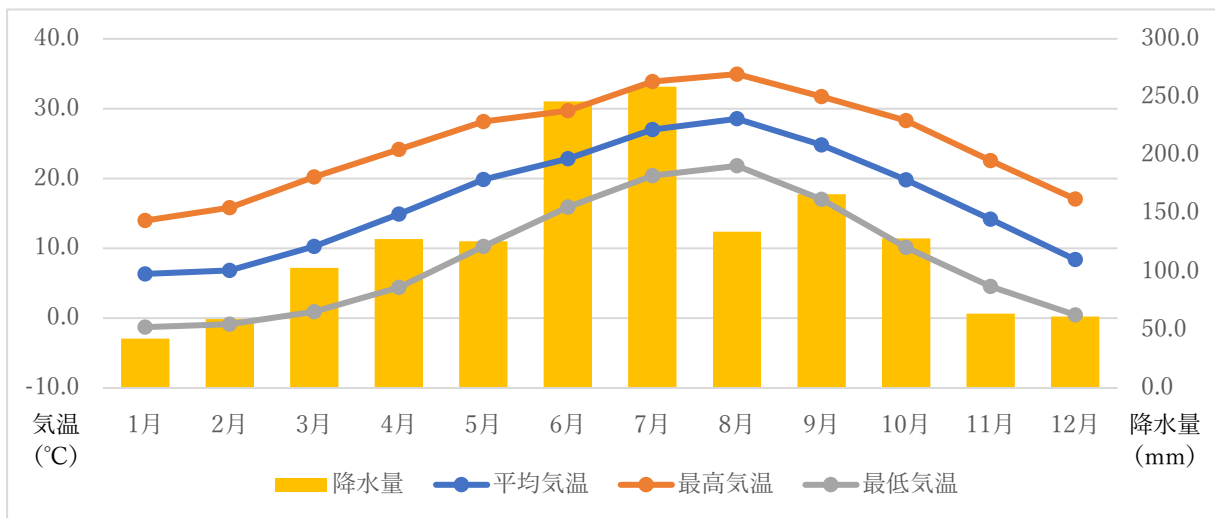
また、広地区、下蒲刈地区、蒲刈地区には石灰岩地帯があり、かつては盛んに採掘が行われ、農地の肥料として利用されていました。



呉市の地質（産総研日本シームレス地質図 v2 より）

(4) 気候

呉市は、温暖で多照少雨の瀬戸内海式気候に属し、年間を通じて概して暮らしやすい気候です。一年の平均気温は約16.6℃であり、月別の平均気温は、最も高い8月は約28.5℃、最も低い1月は約6.3℃となっています。また、夏冬通じて晴天の日が多く、年間の降水量の平均値は1,500 mm程度で、山陰地方の2,000 mm程度、四国太平洋側の2,500 mm程度に比べるとかなり少なくなっています。しかしながら、複雑な地形のため、梅雨前線や台風に起因する風水害や高潮被害がしばしば起こっています。



平均気温と平均降水量（平成23（2011）年～令和2（2020）年の10年間平均）

（「気象庁呉特別地域気象観測所データ」より）

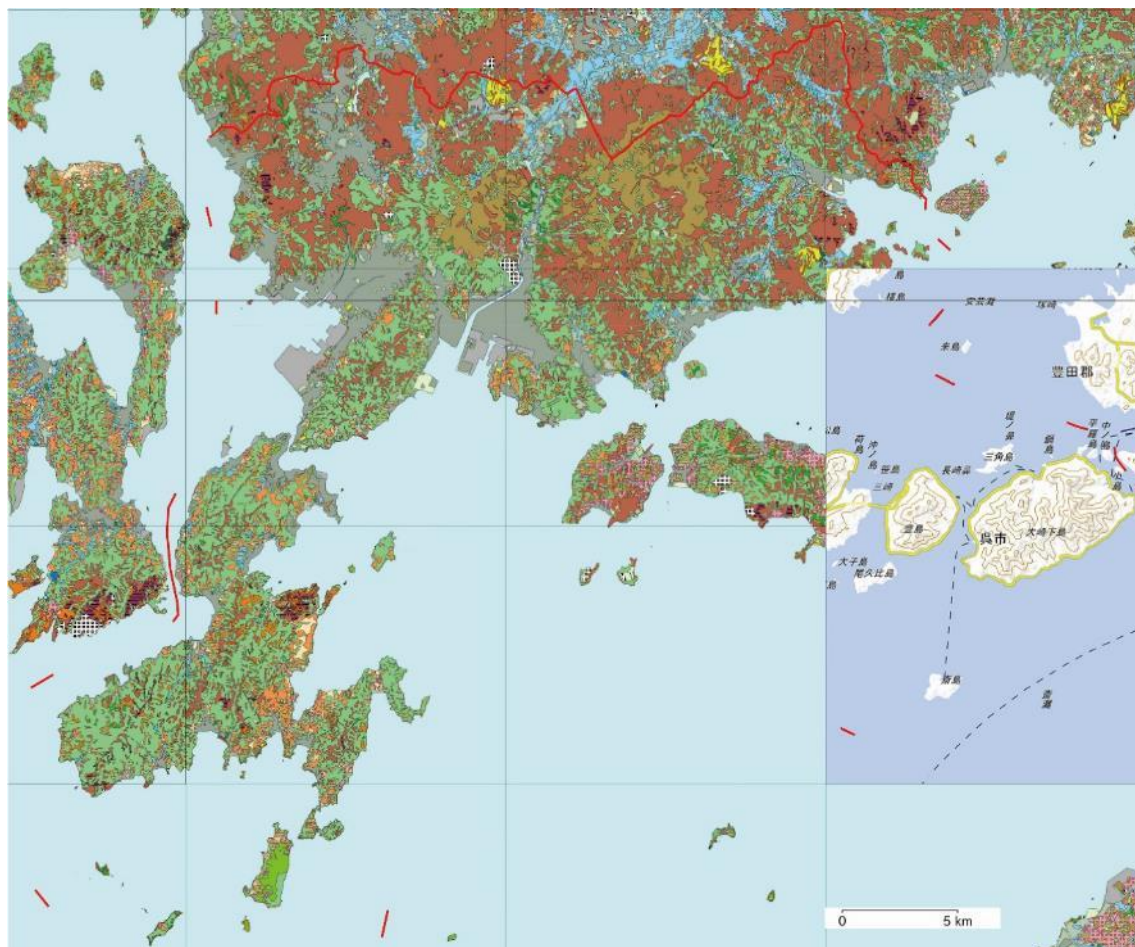


火山山頂からの眺望



野呂山の岩海

第2章 呉市をいろいろな視点から見てみよう



【凡例】

130106 シラキ・ブナ群集	400110 シリブカガシ二次林	510100 石灰岩地植生
130401 イヌシデ・アカシデ群落	400200 タブノキ・ヤブニッケイ二次林	540100 スギ・ヒノキ・サワラ植林
140800 ヒノキ群落	400600 ウバメガシ二次林	540200 アカマツ植林
220100 ブナ・ミズナラ群落	410100 コナラ群落	540300 クロマツ植林
220102 クリ・ミズナラ群集	410400 アカシデ・イヌシデ群落	540900 外国産樹種植林
220700 アカシデ・イヌシデ群落	410700 アカメガシワ・カラスザンショウ群落	541000 その他植林
260000 伐採跡地群落	410900 ミズキ群落	541203 オオバヤシヤブシ植林
270200 アラカシ群落	411001 アカメガシワ・エノキ群落	541301 クスノキ植林
271100 コジイ群落	411400 クサギ・アカメガシワ群落	541303 クスノキ群落
271200 スダジイ群落	420100 アカマツ群落	550000 竹林
271700 ホルトノキ群落	420200 クロマツ群落	560100 ゴルフ場・芝地
271800 カゴノキ群落	420107 ネズ・アカマツ群落	560200 牧草地
280100 モミ群落	430000 タケ・ササ群落	570100 路傍・空地雑草群落
290200 クロマツ群落	430200 メダケ群落	570101 放棄畑雑草群落
300200 ムクノキ・エノキ群落	440200 クズ群落	570200 果樹園
310100 ハンノキ群落	450100 ススキ群団	570202 常緑果樹園
310101 ハンノキ群落	450300 ウラジロ・コシダ群落	570300 畑雑草群落
320100 ヤナギ高木群落	450400 ダンチク群落	570400 水田雑草群落
320200 ヤナギ低木群落	460000 伐採跡地群落	570500 放棄水田雑草群落
330700 イワシデ群落	470200 ヌマガヤオーダー	580100 市街地
331000 イワガサ群落	470400 ヨシクラス	580101 緑の多い住宅地
340101 マサキトベラ群集	470501 ツルヨシ群集	580200 残存・植栽樹群をもった公園、墓地等
340201 トベラ・ウバメガシ群集	470502 オギ群集	580300 工場地帯
340601 ハマヒサカキ・ビャクシン群落	470600 ヒルムシロクラス	580400 造成地
400100 シイ・カシ二次林	470602 外来水草群落	580600 開放水域
400102 アカガシ二次林	480000 塩沼地植生	580700 自然裸地
400107 アラカシ二次林	490000 砂丘植生	580800 残存・植栽樹群地

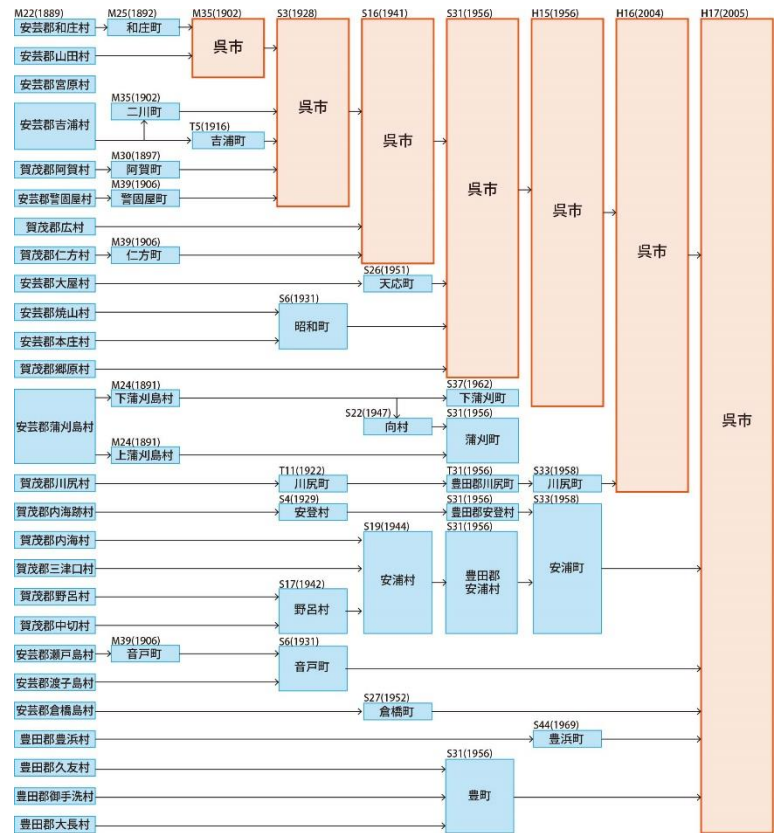
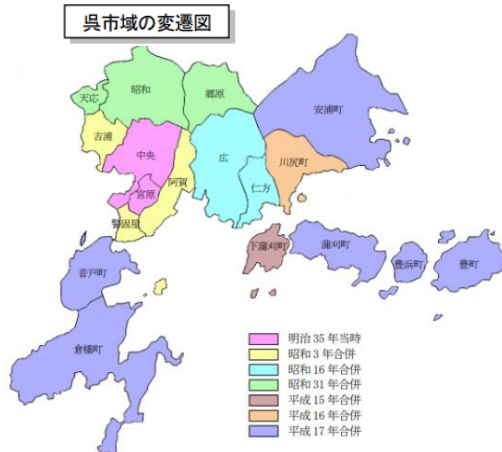
呉市の植生図（「環境省植生図」より）

2 社会的状況

(1) 市域の変遷

明治35（1902）年10月1日に、全国で55番目に市制を施行しました。昭和3（1928）年には吉浦町・阿賀町・警固屋町と合併、昭和16（1941）年には広村・仁方町と合併、昭和31（1956）年には天応町・昭和村・郷原村と合併、そして、平成15（2003）年から平成17（2005）年にかけての下蒲刈町・川尻町・音戸町・倉橋町・蒲刈町・安浦町・豊浜町・豊町との合併により現在の呉市の姿となり、平成28（2016）年には中核市へ移行しました。

本計画においては、市制施行以前の呉市を中央地区・宮原地区、それ以降の旧合併町村を16地区として計18地区を設定します。それぞれの地区には、まちづくり委員会・協議会が設置されており、地域住民による様々な取組を展開していることから、地区ごとに歴史文化の特徴や施策を検討します。



呉市の合併の経緯

(2) 人口動態

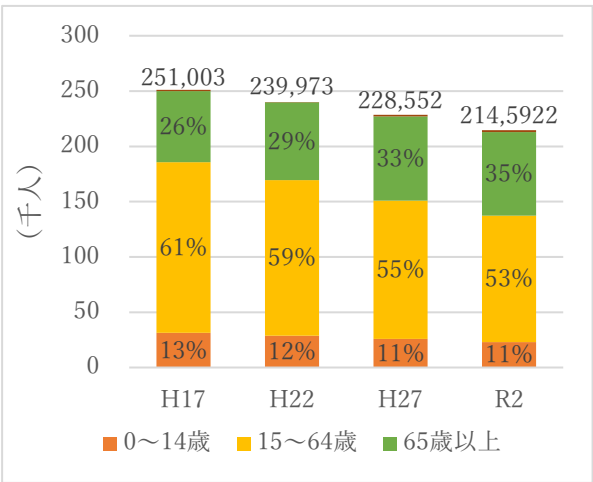
平成17（2005）年をピークに人口減少が続いており、国や広島県と比べて早い時期に人口減少への転換期を迎え、令和6（2024）年の人口は203,549人となっています。

世帯数は平成17（2005）年から減少傾向にあります。世帯当たりの人員の減少傾向が顕著であり、平成17（2005）年には2.5人だったのが、令和6（2024）年には1.9人となっています。

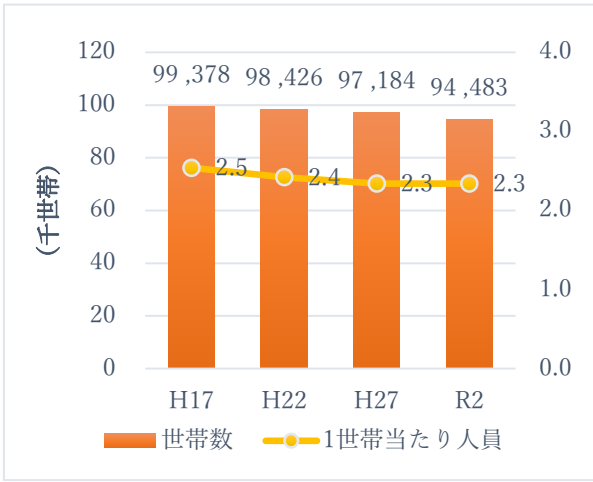
第2章 呉市をいろいろな視点から見てみよう

直近10年間の人口動態を見ると、年ごとの増減はあるものの、全体的に減少傾向が拡大しています。また、直近10年間の地区別人口の推移を見ると、比較的人口の多い地区の減少率が低く、島しょ部などの人口の少ない地区での減少率が高い傾向が見られます。

将来人口は、現在の傾向で減少が続けば、令和22（2040）年には16.2万人まで減少すると推計されています。「呉市まち・ひと・しごと創生総合戦略及び人口ビジョン」では、市民の希望を実現するための施策を展開することにより、令和22（2040）年には18.4万人の人口を展望しています。



人口の推移（「国勢調査」より）

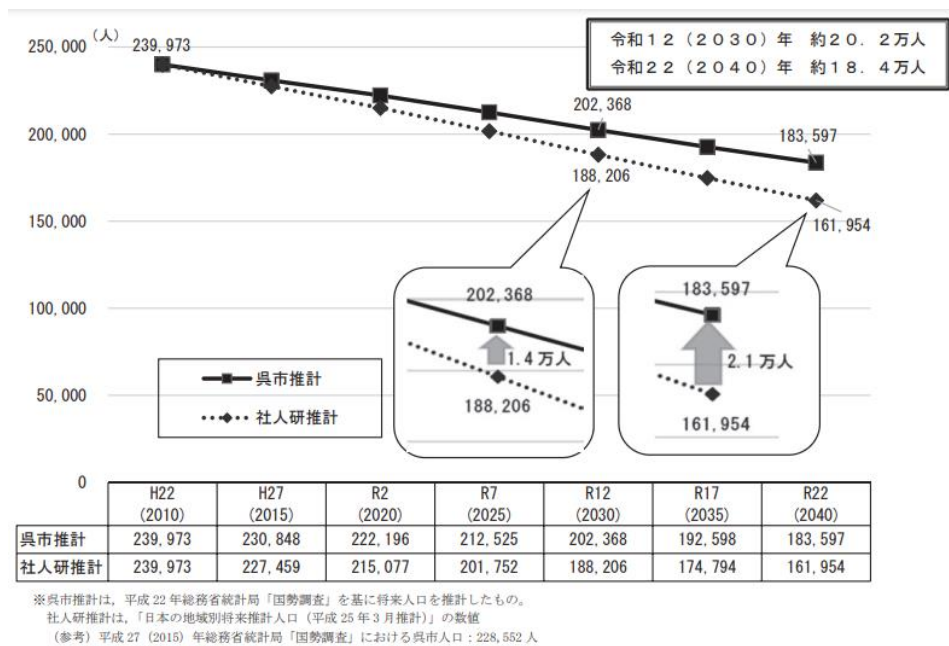


世帯数の推移（「国勢調査」より）

地区別人口の推移（「呉市統計書」より、各年3月末）

（単位：人）

地区名	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R5/H26
中央	52,342	51,951	51,423	51,127	50,096	49,966	49,408	48,428	47,695	46,977	89.8%
吉浦	10,864	10,729	10,563	10,398	10,310	10,111	9,899	9,773	9,619	9,436	86.9%
警固屋	5,165	5,034	4,888	4,805	4,675	4,532	4,321	4,205	4,010	3,931	76.1%
阿賀	16,201	15,932	16,016	15,779	15,538	15,259	15,054	14,760	14,359	14,105	87.1%
広	46,622	46,806	46,942	46,986	46,996	46,695	46,015	45,332	44,470	43,915	96.3%
仁方	6,861	6,734	6,609	6,481	6,352	6,280	6,212	6,112	5,986	5,855	85.3%
宮原	7,909	7,740	7,607	7,420	7,312	7,156	7,197	6,984	6,769	6,638	83.9%
天応	4,372	4,305	4,256	4,169	4,087	3,874	3,807	3,798	3,761	3,672	84.0%
昭和	34,822	34,665	34,349	34,092	33,730	33,353	32,939	32,531	31,910	31,580	90.7%
郷原	4,993	5,004	4,988	4,933	4,855	4,793	4,712	4,565	4,454	4,399	88.1%
下蒲刈	1,625	1,582	1,518	1,484	1,439	1,406	1,369	1,322	1,271	1,216	74.8%
川尻	9,054	8,899	8,678	8,571	8,450	8,284	8,224	8,086	7,729	7,575	83.7%
音戸	12,645	12,453	12,204	12,008	11,789	11,505	11,236	10,970	10,603	10,464	82.4%
倉橋	6,082	5,901	5,676	5,460	5,346	5,198	5,026	4,903	4,669	4,565	75.1%
蒲刈	1,967	1,874	1,813	1,751	1,687	1,644	1,587	1,499	1,464	1,421	72.2%
安浦	11,586	11,367	11,203	11,053	10,842	10,536	10,360	10,151	9,879	9,721	83.9%
豊浜	1,619	1,565	1,513	1,458	1,394	1,323	1,276	1,223	1,163	1,133	70.0%
豊	2,127	2,072	1,984	1,893	1,827	1,770	1,702	1,631	1,548	1,493	70.2%
合計	236,856	234,613	232,230	229,868	226,725	223,685	220,342	216,273	211,359	208,096	92.1%



将来人口の推計（「呉市まち・ひと・しごと創生総合戦略及び人口ビジョン」より）

（3）観光客数

呉市は、平成15（2003）年から平成17（2005）年にかけての近隣8町との合併による観光資源の拡大や、平成17（2005）年の呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）の開館により、平成18（2006）年に総観光客数が495万人に達しました。また、平成28（2016）年に「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」が日本遺産の認定を受け、平成30



呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）

（2018）年には「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」が、日本遺産の構成自治体に追加認定されたことなどから、総観光客数は400万人台を維持してきました。

しかし、平成30年7月豪雨による甚大な被害から総観光客数は減少し、その後は回復傾向にありましたが、令和2（2020）年は新型コロナウイルス感染症の影響により総観光客数は158万人へと激減しています。市内においては、呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）に多くの観光客が訪れており、他の施設等への波及効果が期待されます。

周辺の市町村と比較すると、広島市や廿日市市、尾道市、福山市等に多くの観光客が訪れています。いずれも歴史が大きな観光としての魅力を形成しており、呉市内においても文化財を活用した観光コンテンツの充実により、周辺の市町村の観光客を市内に誘引することが期待されます。

第2章 呉市をいろいろな視点から見てみよう

施設ごとの観光入込客数（「呉市統計書」より）

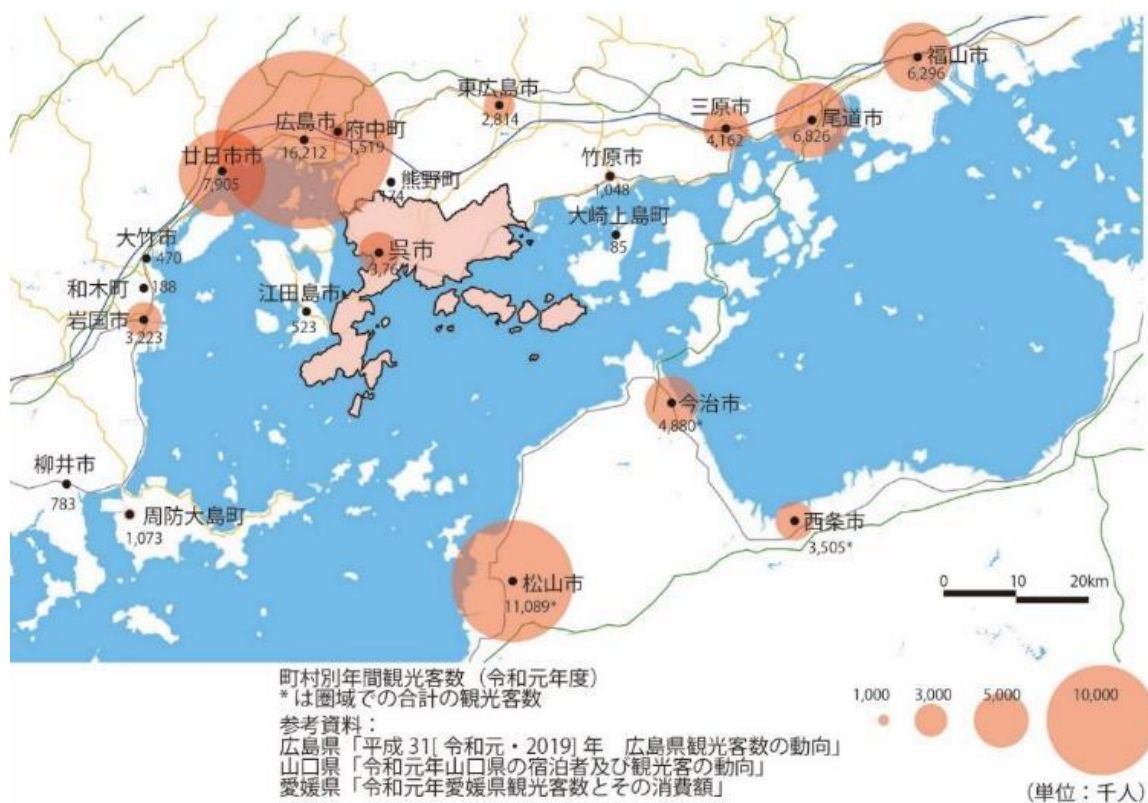
（単位：人）

	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
松濤園	14,843	15,168	13,855	16,108	14,250	13,502	12,007	15,753	7,567	7,504
野呂山ビジターセンタ	47,028	46,919	47,821	51,796	50,328	46,174	27,822	33,118	30,448	21,657
呉市川尻筆づくり資料館	6,065	5,390	4,691	5,413	5,453	4,413	3,224	3,681	2,128	1,767
おんど観光文化会館うずしお	81,127	60,710	57,268	69,979	72,305	70,701	56,679	61,499	41,301	41,498
くらはし桂浜温泉館	87,677	90,988	91,760	92,532	88,982	88,809	78,544	95,065	65,754	67,013
かまがり温泉やすらぎの館	42,527	41,643	41,906	39,879	41,305	39,659	27,983	37,623	10,557	17,278
かまがり古代製塩遺跡復元展示館	9,035	8,176	7,118	8,395	8,354	7,023	6,157	7,836	3,386	5,955
かまがり古代土器製塩体験施設	5,418	5,123	4,891	5,010	5,426	4,938	4,482	5,494	1,654	4,724
グリーンピアせとうち	151,713	143,553	109,274	113,780	115,273	57,169	131,947	102,317	27,307	29,028
御手洗地区文化施設	5,010	3,918	3,065	3,209	4,305	2,657	1,606	4,773	2,780	3,082
呉市立美術館	48,322	63,071	53,061	50,089	52,585	49,468	45,043	36,619	25,595	23,834
入船山記念館	19,189	19,472	20,478	20,661	23,056	28,604	20,974	28,678	12,135	12,511
海事歴史科学館（大和ミュージアム）	849,984	909,318	876,245	1,006,336	955,617	929,743	686,799	908,353	258,055	251,164

呉市の観光客数（「呉市統計書」より）

（単位：千人）

	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
呉市	3,238	3,198	3,080	3,366	3,363	3,318	2,743	3,042	1,321	926



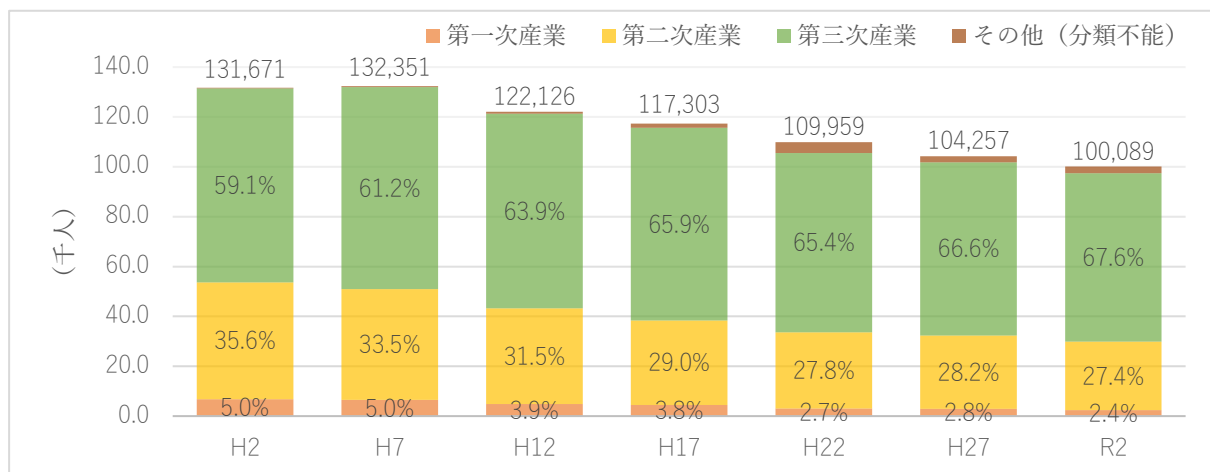
呉市および周辺市町村の観光客数（「呉市統計書」より）

(4) 産業

昭和25（1950）年の平和産業港湾都市への再生を目指す「旧軍港市転換法」の制定により、造船、鉄鋼、機械金属、パルプ産業等の企業が進出し、瀬戸内の重要な臨海工業地帯としての基盤を確立した呉市は、広島県の産業をけん引してきました。

海域は狭隘ながら複雑な地形や潮流のもと県内でも有数の好漁場に恵まれ、小型底引網、刺網、釣りなどの多様な漁船漁業が営まれ、静穏な内湾域は牡蠣などの養殖業に利用されています。市内の漁業生産量及び生産額ともに県内の約4分の1を占め、広島県における漁業の中心的な位置を占めています。

令和2（2020）年の産業別就業者割合を見ると、就業者の約7割は第三次産業に属しており、平成2（1990）年から第一次産業と第二次産業は微減傾向にあります。



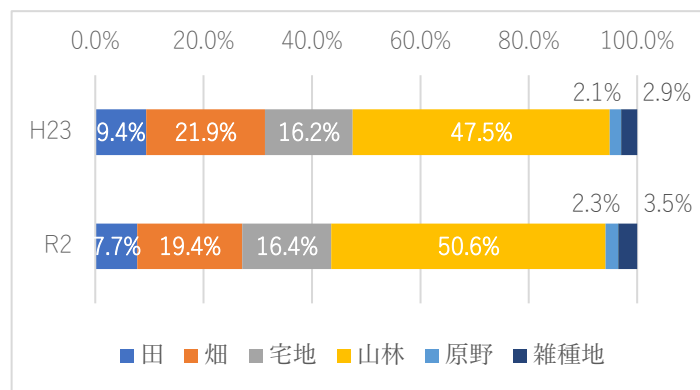
産業分類別の就業者数の推移（「国勢調査」より）

(5) 土地利用

呉市は、市域全体を通して平たんな土地が少なく、野呂山や灰ヶ峰などの山々が地域を分断しており、明治22（1889）年の呉鎮守府開庁以降、海軍の拡張に伴う人口の急増により、中央地区を始めとする斜面地に家屋が密集するといった特徴的な市街地を形成しています。

市内の土地利用について用途別に面積を見ると、山林が最も多く50.6%を占め、次いで畑が19.4%、宅地が16.4%の順となっています。

10年間の推移をみると、田・畑・の割合が減少し、山林の割合が増加しています。

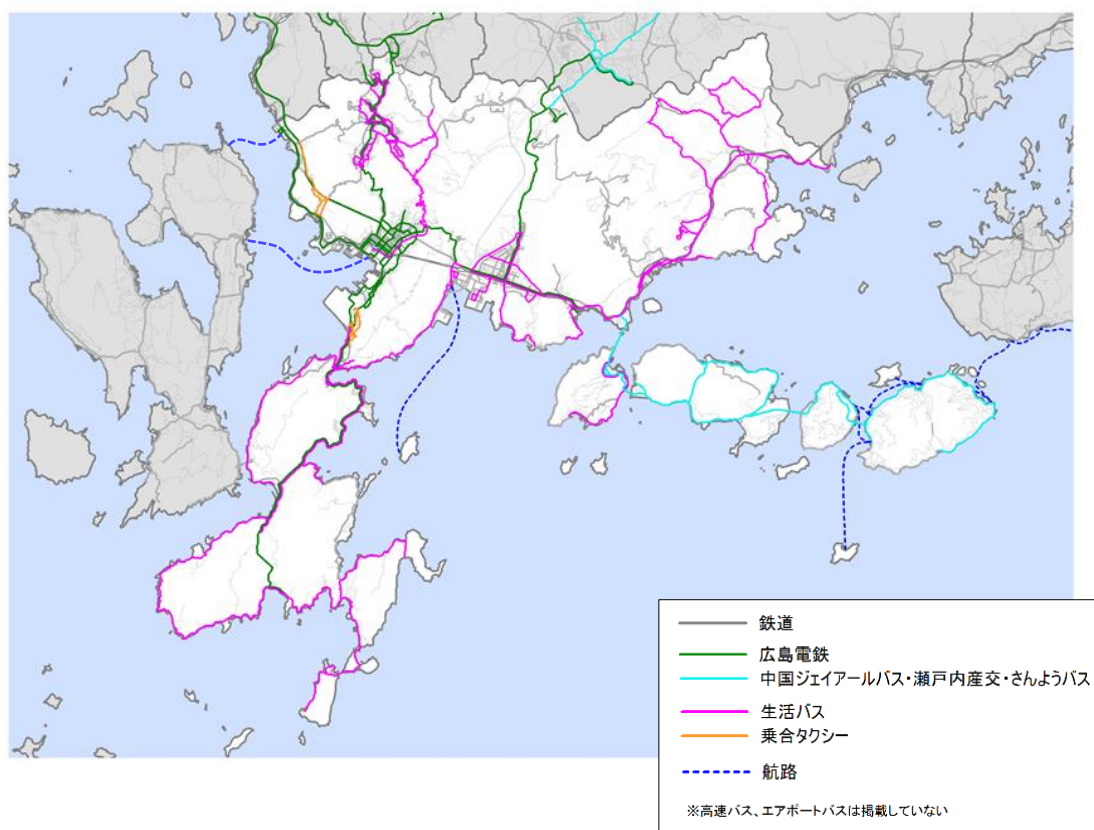


用途別土地利用面積の割合（「呉市統計書」より）

（6）交通

市内には、一般国道として中央地区と東部を結ぶ国道185号、中央地区から広島市方面を結ぶ国道31号、中央地区と江能倉橋地域を結ぶ国道487号、そして、広から郷原を通って山陰方面へ延びる国道375号があり、主要地方道としては、呉環状線や呉平谷線などの幹線道路があります。また、呉市と広島市を結ぶ広島呉道路や、中央地区と東部地区を結ぶ休山新道、警固屋音戸バイパス（第二音戸大橋含む）なども整備されているほか、平成27（2015）年3月15日には、呉市と山陽自動車道を直結する東広島・呉自動車道が全線開通しました。また、音戸大橋（昭和36（1961）年）、蒲刈大橋（昭和54（1979）年）、豊浜大橋（平成4年（1992）年）、安芸灘大橋（平成12（2000）年）、豊島大橋（平成20（2008）年）など、島しょ部を結ぶ橋梁が整備されました。

公共交通は、鉄道、バス及び航路の3つに大別でき、市域を東西に貫くＪＲ呉線と市域の大半をカバーする路線バスを基軸とし、これらを補完する移動手段として、生活バスや乗合タクシー、本土と離島とを結ぶ航路などで構成されています。



呉市における公共交通網（「呉市地域交通網形成計画」より）

(7) 災害

呉市では、戦後、昭和20（1945）年9月の死者1,000人以上の大きな被害となった枕崎台風を始め、昭和42（1967）年7月の豪雨、平成11（1999）年6月の豪雨、平成13

（2001）年の安芸灘を震源とするマグニチュード6.7、最大震度6弱の芸予地震などの風水害や地震等により多くの被害がもたらされました。

また、平成30年7月豪雨では、市内で182件の土砂災害が発生し、死者30名（関連死を含む）・負傷者22名（令和5（2023）年3月末時点）と、近年まれにみる大きな被害を受けました。この災害では、各地で道路や鉄道など物流機能が寸断され、経済活動にも大きな影響を及ぼしました。

① 高潮・洪水による浸水被害

約300kmに及ぶ海岸線を有しており、高潮・高波の影響を受けやすく、また、都市機能が多く集積する中央・広地区では、河川の氾濫により浸水被害が発生しています。

② 地震・津波災害の想定

南海トラフ巨大地震が発生した場合、最大で震度6弱の揺れと高さ3.6mの津波が想定されており、ライフラインやインフラ施設、経済活動等へ大きく影響することが想定されます。広島県の津波に関しては、過去の古文書においても被害はほとんど報告されていません。

③ 気象災害

昭和20（1945）年以降の主な災害は、梅雨前線の大雨によるものと、台風による暴風雨、高潮によるものが大部分を占めています。雨の災害は、台風のほかに梅雨前線に伴う局地的豪雨により発生しています。

3 歴史的背景

(1) 先史

暮らしの始まり

旧石器時代、瀬戸内海が陸地だった頃の呉市の姿を伝えるものとして、倉橋島南海域からナウマンゾウやニホンムカシジカの化石骨・歯・角が底引き網であがっています。また、平成12(2000)年には、情島旧石器時代遺跡から多数の石器が発見されました。

縄文時代には、内陸部や沿岸部で人々の暮らしが営まれていました。芦冠遺跡出土の板状土偶は、当時の精神生活の一端を垣間見ることができる県内有数の貴重な資料となっています。また、郷原遺跡では、隠岐・大分姫島産黒耀石、香川金山産サヌカイト製石器が出土しており、縄文時代の瀬戸内海文化圏・交易圏の広がりをよく示しています。

呉市域では、明治以降の開発(軍港・工場建設)による沿岸部の地形の破壊の結果、弥生・古墳時代の遺跡はほとんど失われたと考えられています。情島火の釜古墳群は、横穴式石室を持つ後期古墳です。倉橋町でも後期古墳である岩屋古墳や、祭祀遺跡とみられるトロブ遺跡や亀ヶ首遺跡が陸繋砂州という特徴的な地形において見つかり、航海安全を祈って、盛大な祭祀を行ったと考えられています。入船山・吉浦・麗女島・警固屋などでも須恵器が出土しています。また、蒲刈町では、沖浦遺跡から古墳時代前半の製塩土器が発見されており、当時の生業のあり方を伺うことができます。



情島火の釜1号古墳

(2) 古代

安満郷呉保と船木郷

広島県西部(安芸)では、弥生後期から古墳時代にかけて地域社会が発達し、やがて大和国家に属し、阿岐国となりました。一方で、沿岸部、島しょ部は奈良・平安時代に「安満郷」と呼ばれ、漁業・製塩、そして舟運を主な生業とする海民の生活の舞台でした。海民たちは、早くから阿岐国造の支配下に入り、阿岐国造を介して大和国家に貢納・力役を行っていました。藤原宮出土木簡の「安芸国安芸郡海里倉橋部□□調塩三斗」という記載は、調として中央政府に塩を貢納していたことを示しています。

8世紀の大宝律令の制定によって完成した律令国家において、現在の呉市域には、安芸郡域に「安満郷」・「船木郷」、賀茂郡域に「香津郷」がありました。船木郷は、安芸郡域において造船用材である櫓の製材を生業とする山民を編戸して設定されました。遣唐使船が建造されたとされる安芸国は倉橋島と比定されています。

皇室領安摩荘呉浦と石清水八幡宮領呉保

安満郷の海民は、奈良・平安時代に徐々に各浦・島へ定住していったと考えられています。海民の定住化によって安満郷は行政単位としての統一性を次第に失い、平安後期には、それぞれ開発領主を徴税請負人とする国衙領内の独立した行政単位になっていたと思われます。また、船木郷・養隈郷やの ぐうも行政単位としてのまとまりを失い、沿岸地域に定住した安満郷海民との結びつきを強め、呉浦・矢野浦として新たな行政単位に再編されます。

呉浦では開発領主が荒野を開発する見返りに、国衙から独立させた新しい徴税区である「呉別符」を設立し、その雑工事分を石清水八幡宮に寄進し、石清水八幡宮領呉別符としました。

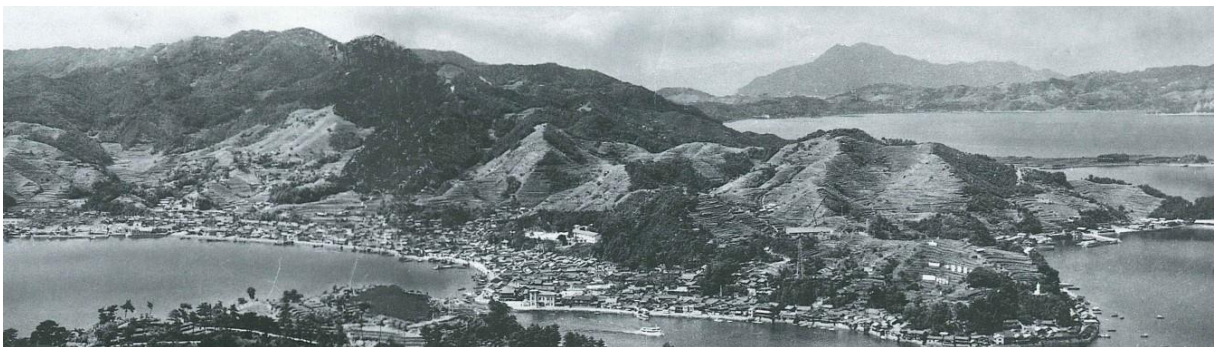
その後荘園化の波が押し寄せると、倉橋島は摂関家領倉橋荘、蒲刈島は興福寺領日高荘、波多見島・江田島・呉浦・矢野浦は皇室領安摩荘として立荘され、呉浦の収取関係は複雑化していきます。この問題を解消するため、石清水八幡宮による一円的領有として石清水八幡宮領呉保になります。

音戸瀬戸と平清盛

古代以来、近辺の東西航路には倉橋島沖ルートと音戸瀬戸おんどの せ とルートがありました。天平8(736)年、遣新羅使が立ち寄った長門島は倉橋島のことであり、亀ヶ首遺跡から出土した和同開珎の枝銭は、倉橋島沖ルートの航海の安全を祈願してお供えしたものと考えられます。

一方、調庸などの貢納物を都に運ぶ船などは、音戸瀬戸ルートをとったものと考えられています。音戸瀬戸は海運の要衝であり、狭あいでの潮流の激しい海峡でした。西国からの貢納物運京などの航行の多くが音戸瀬戸を通過し、安芸守をつとめた平清盛は、このルートで頻繁に厳島に参詣しています。

また、平清盛は、瀬戸内の海上交通の掌握につとめました。警固屋という地名は、音戸瀬戸を通過する見張り小屋に起源を持つともいわれ、地元では、音戸瀬戸は平清盛により開削されたという伝承も残されています。



音戸町展望（昭和 33（1958）年）

（3）中世

伊予衆の北上と呉衆の形成

鎌倉後期、呉をはじめ芸南沿岸島しょ部の諸荘園では、在来の小領主層が伊予衆と結んで現地支配権を握ろうとする動きが盛んになり、海域を勢力基盤とする海の領主たちの支配下に入っていました。

もともと伊予国周敷郡北条郷地頭であった多賀谷氏は、鎌倉幕府倒壊の混乱の中で、蒲刈・倉橋を支配下におきます。その多賀谷氏も、観応2（1351）年、南朝方海賊勢力に推戴された懐良親王によって蒲刈島を没収されるなど、混乱がしばらく続きます。

一方、貞治2（1363）年、防長二国（山口県）の守護に任じられた大内氏は、東西条を中心とする安芸国国衙領から武田・小早川両氏の勢力を駆逐しました。安芸国東西条の領国化に成功した大内氏は、伊予への帰還を目指していた河野氏を援助する代償として、占拠していた屋代島・波多見島・呉・矢野・倉橋・蒲刈を割譲させ、河野氏によって伊予から放逐された野間氏・多賀谷氏・山本氏らを被官として受け入れました。

呉保とその近隣地域には、山本氏、檜垣氏、警固屋氏らによる「呉衆」という小領主連合が形成されました。

戦国の争乱 呉衆の活躍と没落

1370年代までには、室町・戦国期の芸南沿岸島しょ部の勢力配置図はほぼ確定し、呉保の領域を支配した山本氏の和庄杉迫城、阿賀を支配した檜垣氏の竜王山城、警固屋氏の堀城などが築かれました。矢野・吉浦・天応・昭和地区は、野間氏が占拠し、吉浦堀城を野間水軍の本拠地とし、苗代に掃部城、押込に古塁、焼山に城平山、天応に塔ノ岡・天狗城など領域内に城砦網を張り巡らせました。多賀谷氏は倉橋・蒲刈を領有し、倉橋多賀谷氏は倉橋に丸子山城を、蒲刈多賀谷氏は下蒲刈に丸屋城を築きました。



丸屋城跡

呉衆・多賀谷氏・能美氏は、緊密な連合を形成し「三ヶ島衆」と称し、大内直属海賊衆として、応仁・文明の乱以降、大内水軍の中核として活躍します。

大永3（1523）年の尼子氏の安芸侵攻に際しては、瀬戸城（音戸）は乃美賢勝を守将とし、「三ヶ島衆」は小早川氏と乃美氏の指揮下で行動しています。

天文23（1554）年、毛利元就は、陶晴賢と決裂し、佐東の諸城と厳島を占領します。このとき「三ヶ島衆」は陶氏の石見攻めに参加していました。山本氏は、陶（大内）方にとどまり、能美・多賀谷の両氏もこれに同調します。一方、小早川隆景は、呉地方を接収して呉・瀬戸に要害を建設し、このため呉衆は帰るところを失うこととなりました。

「三ヶ島衆」は陶方の白井賢胤指揮下で活動し、各地を転戦します。弘治元（1555）年、倉橋多賀谷氏を支援しようと白井水軍は倉橋島で小早川軍と戦いますが大敗し、倉橋多賀谷氏はこの時滅亡します。

小早川氏支配下の呉

呉地方の大半は小早川隆景の領地となり、小早川氏の家臣に給与されました。呉・瀬戸（音戸）は、小早川水軍の基地となり、旧呉衆の生き残りなどは小早川水軍の一部に編成され、数多くの戦闘に動員されました。

なお、旧野間領の吉浦は吉川元春の領地となり、野間氏の旧臣は吉川氏に召抱えられ吉川水軍の水夫に編制されます。関ヶ原の合戦後は、主家吉川氏の岩国への転封に従い、岩国藩船手組（水軍）となっています。

（4）近世

近世村落の成立

関ヶ原の戦いの後、広島城には福島正則が尾張清洲から入り新しい領主となりました。慶長6（1601）年には全領地で検地を実施しました。呉衆の系譜を引く者もそのほとんどが自らの旧所領の名請人（耕作者）として百姓身分となり、庄屋や年寄となりました。

港町の発展

福島正則は下蒲刈地区三之瀬に海駅を設け、長雁木を築きました。三之瀬を公の繫船場として番所や本陣の御茶屋を常備し、参勤交代をする西国大名の船をはじめ各国の使節もここに立寄りました。朝鮮通信使は、慶長12（1607）年に第一回目の寄港をして以来、宝暦14（1764）年まで計11回三之瀬に寄港しました。

豊地区御手洗では寛文6（1666）年、屋敷地町割りの許可を得て町場が形成されました。西廻り航路が確立されたことで、沖乗り航路の潮待ち・風待ちの港として、北前船などの廻船が寄港するようになり、18世紀に入って急速に発展しました。



長雁木（福島雁木）



御手洗の町並み

新開の築調と安定的な農業の発達

現在の呉市域の宅地や耕作地の大半は、江戸時代の新開築調によって形成されました。大部分が干潟であった広湾では、江戸時代を通じて新開が造成されました。その他、宮原村や庄山田村、和庄村、阿賀村等でも大規模な新開築調が行われ、現在の呉市の礎が形成されています。

農業生産の安定のため灌漑施設の整備が行われました。庄山田村の庄屋熊崎新左衛門は、享保9（1724）年に二河川下流を取水口とした井手の工事に着手し、村民総出で二河下井手を完成させました。寛保元（1741）年には、新左衛門の子の弥七が新たに流路を掘削し、二河上井手を構築しました。宮原村では宮原の長渠と呼ばれる灌漑施設（約180mのトンネル状の放水路）が、文化14（1817）年に完成しています。

また、広島藩は経済的に困窮する御家人や農民を救済するため、関係する村々の庄屋などと協議し、野呂山開拓を決定しました。入植した村民は、ため池を掘り水路を設け、農地を拓き、獣害防止の石柵や道路を造りました。



長渠の碑

漁業の発展

17世紀後期、豊島の漁師徳右衛門らが尾久比二窓の鳥持網代（アビ漁場）を発見しました。この頃齋島の漁夫又右衛門が齋島鳥付網代を、元禄8（1895）年頃、大浜の漁夫久松らが「馬乗」・「雀」の網代を発見するなど、漁業が盛んになります。

江戸時代には干鰯（イワシを乾燥させて農作物の肥料としたもの）が主要な産物として取引されました。江戸時代末には、漁網が地元で作られるようになりました。



アビ渡来群游海面
（昭和 58（1983）年頃のアビ漁の風景）

（5）近代

鎮守府の開庁

明治政府は、近代的軍制を進め、明治5（1872）年に陸軍省と海軍省を創設し、明治9（1876）年には軍港の整備として、東海及び西海鎮守府を設置することを決定しました。

西海鎮守府の候補地の調査として、明治16（1883）年に東京を出発した肝付兼行少佐一行は、呉湾は理想的であると判断し、その後も調査が続けられます。明治19（1886）年4月には海軍条例が制定され、全国を五海軍区とし、各海軍区の軍港に鎮守府を置くこととなりました。造船所と鎮守府を一体とする海軍の一大拠点地を設立するという考えで、同年5月には海軍一の造船所を有する第二海軍区鎮守府の位置として呉港が決定しました。

明治19（1886）年10月には土木工事が、11月には建築工事が起工されました。明治22（1889）年に呉鎮守府が開庁します。明治23（1890）年4月には、明治天皇の行幸を得て、開庁式が行われました。

呉浦の変化

鎮守府が設立されることで、宮原村の呉町を中心に約77町歩（約77ha）が海軍用地として買収され、1,023戸の住民が立ち退きを命ぜられました。移転は、住宅ばかりではなく、呉浦総氏神の亀山神社や宮原村の正円寺にまで及んでいます。

鎮守府工事とあわせて、呉鎮守府建築委員は、一面の水田に基盤目の市街化計画を作成し、市街地の形成を進めました。海軍用地より灰ヶ峰に向かい真っすぐに伸びる景観の優れた10間道路は、広く並木が整備された「一種の模範的道路※」でした。周辺の村へ延びる道路が開通され、家屋の建築が促進され都市化が進んでいきました。一方で、農業や漁業などは衰退していくこととなりました。

※出典：『呉市水道史』第2巻



呉浦の風景（明治 19（1886）年頃）

呉海軍工廠の成立と発展

明治 22（1889）年の造船部・兵器部を含む呉鎮守府が開庁し、呉には軍人および艦艇が配備され、急速に軍港としての性格を強めていきます。

造船部では、明治 24（1891）年 4 月には第 1 船渠、同 9 月には製図工場、明治 25（1892）年 3 月には第 1 船台と造船工場、明治 26（1893）年に第 2 船台と船具工場というように次々と関係施設が完成しました。日清戦争を経て、拡張が本格化し、明治 30（1897）年 10 月には造船部が造船廠に改組され、呉における最初の軍艦「宮古」が進水しました。さらに明治 31（1898）年 12 月には、1 万トン以上の艦艇が改修できる東洋一の第 2 船渠が完成しました。その後、明治 35（1902）年には巡洋艦「対馬」、明治 36（1903）年には砲艦「宇治」が進水します。

一方、造兵部門では兵器部とは別に明治 23

（1890）年、呉兵器製造所計画が認可され、工事が進められました。明治 29（1896）年 4 月には仮設呉兵器製造所を設立し、本格的な兵器の生産が開始されます。明治 30（1897）年には呉海軍造兵廠を設立し、大砲などの特殊鋼を生産する施設を整備する第 1 期拡張計画（明治 33（1900）～36（1903）年度）、装甲板などの製鉄施設を整備する第 2 期拡張計画（明治 35（1902）～38（1905）年度）により、大砲などの兵器とその素材である特殊鋼を生産する施設が整備されることになりました。

明治 36（1903）年には、事業の統一を目的に、呉海軍造船廠と呉海軍造兵廠は呉海軍工廠に統合され、初代呉工廠長に山内万寿治が就任しました。

日露戦争後も明治 39（1906）年に第 3 船台の建設と第 2 船台の拡張、第 3 船渠と造船船渠開渠（明治 45（1912）年 3 月）と巨大施設の完成が続きました。明治 42（1909）年 4



海軍病院（手前）と建設中の呉鎮守府（奥）



レンガ造などの工場がつぎつぎと誕生する呉海軍造兵廠（明治 30（1897）年）

月には兵器庫・火薬試験所を設立し、明治43（1910）年1月には造兵部が砲煩部と水雷部に発展的に分立するなど、造兵部門の拡充が相次ぎました。こうした造船・造兵部門の充実によって、呉工廠では明治38（1905）年に日本海軍最初の主力艦の「筑波」と、明治39（1906）年に姉妹艦の「生駒」が進水し、名実ともに「帝国海軍第一ノ製造所」となりました。

呉市制の実施と市街地の形成

呉港の発展は、呉湾をのぞむ町村の合併の実現を促進しました。明治35（1902）年に、4町村が合併し、呉市が誕生、市制が施行されました。呉鎮守府開庁にともない急増した呉港の人口は、日清戦争時の明治27（1894）年には27,717人でしたが、同35（1902）年には60,113人を数え、明治42（1909）年には102,072人となり、10万人を突破しました。

明治28（1895）年8月に和庄町字元町に中央勸商場が開設されたことを契機に、商業の近代化が進みました。明治36（1903）年には呉線（呉～海田）が開通し、明治42（1909）年には広島県内初の市街電車が開通します。本通には、銀行や海軍に物品を納入する商事会社が軒を並べ、中通には劇場や飲食店、小売店舗などが集まり、繁華街が形成されていきました。

明治30（1897）年、広島・呉と渋沢栄一など中央の財界人の協力により広島水力電気㈱が設立され、明治32（1899）年には広発電所が完成し、広から呉さらには広島まで送電され、呉市内にも電灯が灯りました。これは日本最初の高圧・長距離送電でした。阿賀町では、明治43（1910）年に中国電気㈱が設立され、ガス火力による発電所を設置し、阿賀・音戸・警固屋町を供給区域として、明治45（1912）年に電燈の供給が開始されました。また、呉鎮守府・呉海軍を医療面で支えるため、呉鎮守府とともに明治22（1889）年に呉海軍病院が開設され、明治37（1904）年には呉海軍工廠職工共済会病院が開設されました。

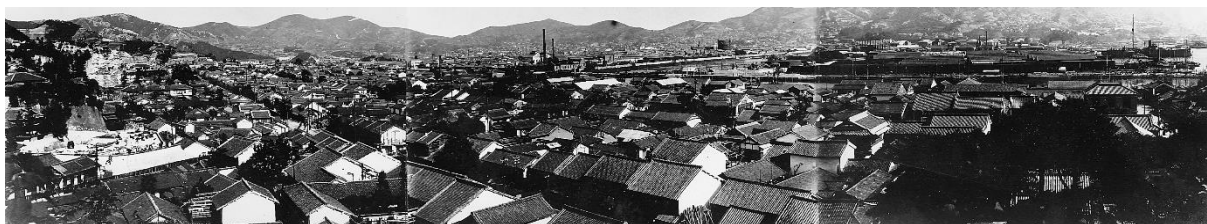
一方、明治22（1889）年3月、広島県で最も早く呉鎮守府水道が開通しました。その後、水道の需要が増大し、本庄水源地を中心とする呉軍港水道拡張計画が作成され、大正7（1918）年に竣工しました。当時東洋一といわれた規模で、一部は呉市水道に分水され、残る大部分は海軍構内（宮原）の浄水場に送られました。

呉海軍工廠と広海軍工廠の形成

日本海軍における最初の主力艦を建造後も呉海軍工廠においては、明治40（1907）年に当時世界最大級の戦艦「安芸」、明治44（1911）年に2万トンを超える戦艦「摂津」、大正3（1914）年に世界最初の3万トン台の戦艦「扶桑」などが進水しました。そして大正8（1919）年には、世界で最初の16インチ（約40センチ）主砲を積んだ戦艦「長門」（33,800トン）が進水するなど、多年の努力が実り世界水準を超える艦艇を建造することができるようになりました。また、大正10（1921）年には、呉海軍工廠広支廠が開庁します。大正12（1923）年4月には分離独立し、広海軍工廠となりました。広海軍工廠では、

第2章 呉市をいろいろな視点から見てみよう

機関・航空機の技術の開発に取り組みました。その後、昭和 16（1941）年 10 月に広海軍工廠の航空機部が独立し、広に第 11 海軍航空廠が設置されることとなります。



大正後期の呉市街（大正 13（1924）年頃）

産業の発展

川尻町では、安政 6（1859）年、上野八十吉が出雲・熊野から筆職人を雇い、川尻筆の製造を始め、昭和初期に全盛期を迎えました。野呂山山頂にある大小の池では、明治 20（1887）年頃から天然氷が作られ、高値で取引されました。

また、日清戦争を契機に、近代産業が発展していきます。酒造業は海軍という大口需要者を得たことなどにより大きく発展します。仁方やすりは呉工廠出身の上松筆助等により目切機が考案され、急成長していきました。艦船・兵器の製造に関わる造船業、研削砥石などの技術も発達しました。また、明治 44（1911）年に国内で初めて国産万年筆（14 金ペン）が製造されました。

良質な石材が多く採れる倉橋では採石場が作られ、豊町では明治時代中頃より、急斜面に農地を開拓し、みかんなどの柑橘類の栽培が盛んになりました。

戦時下の呉市

昭和 6（1931）年の満州事変をきっかけに、上海で日本海軍陸戦隊と中国軍の間で戦闘が開始されると、呉海軍工廠は繁忙となりました。こうした中で、呉市は「消費都市より産業都市へ」を目指し、昭和 10（1935）年に呉～三原間の鉄道開通を記念して、同年には「国防と産業大博覧会」を行い、約 70 万人の入場者数を記録しました。

日中戦争の開始とほぼ時を同じくして、昭和 12（1937）年には、呉海軍工廠において、日本海軍の技術を結集した戦艦「大和」（69,100 トン、46 センチ砲搭載）が起工され、多くの新技術と新技法を取り入れて昭和 16（1941）年に竣工しました。

「大和」の建造に際しては、世紀の巨艦を造るために造船船渠の拡張、秘密保持のための大屋根の建設、46 センチ砲製造のため砲塔工場の増設、大型ピットや起重機の大型旋盤の導入などが行われました。

呉海軍工廠・広海軍工廠の工員数は、それぞれ最大で 99,285 人（昭和 19（1944）年）・43,726 人（昭和 18（1943）年）となり、人口は 40 万人を超えていたと言われています。

第二次世界大戦において、アメリカ軍艦載機が呉軍港内戦艦と呉と広の軍事施設を空襲、さらに深夜から未明におよぶ B29 による市街地への焼夷弾攻撃も行われ、市街地の大半が焼失しました。

（6）現代

戦災からの復興

敗戦から1か月後の昭和20（1945）年9月には、枕崎台風が来襲し、空前の被害を受けました。さらに、同年11月には海軍が解体され、多くの熟練工などが解雇されました。

旧軍用財産の平和産業への転換を目指し、昭和23（1948）年には呉港は開港場の指定を受けました。昭和25（1950）年には「旧軍港市転換法」が制定されます。旧海軍工廠跡地へ相次いで企業が進出しました。海軍の熟練工も活躍し、造船と鉄鋼を中心とする産業港湾都市として復興していきます。



三角兵舎と占領軍テントの目立つ呉市街（昭和21（1946）年頃）

一方、昭和27（1952）年8月には、警備隊西部航路啓開隊本部と呉航路啓開隊が開隊され、昭和29（1954）年6月の「自衛隊法」の公布に伴い、同年7月には海上自衛隊呉地方隊・呉地方総監部が発足しました。



基幹産業の集まる旧呉海軍工廠地区の現況

3 吉浦地区	①南を瀬戸内海に面し、三方を丘陵に囲まれた地形となっており、中心部は住宅が密集しているが、吉浦八幡神社の社叢には古くからの植生が残されている。 ②中腹から裾部にかけて、複数の貝塚や野間氏屋敷跡などが残されている。海上保安大学校が位置する池濱では、海軍工廠施設が設置された。 ③吉浦八幡神社や酒蔵などの歴史的建造物が残されている。海軍工廠施設が設置された池濱には、現在海上保安大学校が置かれ、当時の施設の一部が保存されている。
4 警固屋地区	①休山から連なる山系の先端部に位置しており、対岸に倉橋島を臨む。山が沿岸部まで迫り、起伏の激しい地形となっている。 ②平清盛による音戸の瀬戸開削にまつわる地名起源の伝承が数多く残されている。また海上交通の要衝であった音戸の瀬戸を見晴らす立地であったことから、中世には堀城や小浜城が、近代には高鳥砲台が築かれた。 ③住宅地の中に山城跡が残されているほか、高鳥砲台跡は音戸の瀬戸公園として整備され、砲座や兵舎などの様々な遺構が良好に残されている。
5 阿賀地区	①南を瀬戸内海に面し、三方を休山、灰ヶ峰、大空山に囲まれた地形となっている。海に面する平野部は、近世の新開築調により形成されたものである。 ②沖合の情島では情島旧石器時代遺跡が確認されており、古くから人々が暮らしていたとみられる。近世においては漁網製造を主な産業として発展した。 ③近世に形成された雁木が残されている。また大空山砲台跡は大空山公園として整備され、砲座や火薬庫などの様々な遺構が良好に残されている。
6 広地区	①黒瀬川の河口部に広がる三角州であり、上流部では二級峡や白糸の滝といった名勝地が形成されている。広小坪では地殻変動により曲がった地層や断層が露頭している。 ②丘陵裾部に立地する芦冠遺跡からは、縄文時代の板状土偶が出土している。近世において大規模な新開築調が行われたほか、郷原へとつながる黒瀬街道や岩樋水門などの灌漑施設が整備された。近代においては広海軍工廠（後の第11海軍航空廠）が設置された。 ③民間企業や在日米陸軍管理本部が所有する敷地内において、非常に多くの海軍関連遺構が残されている。
7 仁方地区	①南を瀬戸内海に面し、三方を山に囲まれた地形である。海に面する平野部は、近世から近代に塩田が形成されていたが、昭和40年代に埋め立てられ、やすり団地が整備された。 ②近世から近代にかけて塩田による製塩が行われた。また近代以降は、やすり産業や清酒、醤油の醸造業が盛んに行われた。 ③住宅地の中に河川沿いに整備された雁木や酒蔵など、歴史的建造物が多く残されている。また神楽や権踊りなど近世から近代に伝わった伝統行事が継承されている。
8 天応地区	①市域の西端に位置する。西を瀬戸内海に面し、残る三方を烏帽子岩山などの切り立つ岩山によって囲まれた地形である。地区の中央を流れる大屋川の河口部に平野部が広がる。 ②中世の山城が残されており、毛利氏に滅ぼされた野間隆則の墓及び切腹したという伝説が残る腹切岩がある。 ③野間氏ゆかりの天狗城山や深山の滝など、歴史的な景観を留めている。
9 昭和地区	①市域の北西部に位置し、灰ヶ峰山麓の盆地となっている。灰ヶ峰を源流とする二河川が地区の中央を貫流している。 ②中世には野間氏の勢力下であり、掃部城などの山城が築かれる。近代には旧呉海軍により本庄水源地堰堤水道施設が築造される。 ③昭和30年代後半から急速に宅地開発が進み、呉市最大の郊外住宅地を形成している。本庄水源地堰堤水道施設は現役施設として稼働している。
10 郷原地区	①市域の北東部に位置し、中央を黒瀬川が貫流し、黒瀬盆地の南端にあたる。 ②郷原遺跡からは、縄文時代の土器や打製石器が多量に出土している。中世には黒瀬村の国人新居氏が郷原の岩山城を築いたとされる。戦時中には岩山山頂に砲台が設置された。 ③地域の歴史文化のシンボルとして岩山が活用されている。

第2章 呉市をいろいろな視点から見てみよう

11 下蒲刈地区	①安芸灘とびしま海道によって結ばれた安芸灘諸島のうちの一つ。川尻地区との間の海峡は航行の難所であり、女猫の瀬戸と呼ばれる。 ②中世に勢力を誇った多賀谷水軍が丸屋城を築くなど、往来船舶の停泊地として栄えた。近世には広島藩により三之瀬に本陣・番所・茶屋が整備され、朝鮮通信使も立ち寄った。 ③松濤園を中心として、三之瀬の町並みや雁木などの遺構が残されている。
12 川尻地区	①野呂山の南麓に広がり、瀬戸内海に面する。野呂山に由来する岩海や奇岩など多彩な自然環境を持つ。 ②柏島西の浜遺跡からは製塩遺構が見つかっており、古くから生産活動が行われていた。近世から野呂山頂の開拓が行われ、終戦後には入植や川尻小学校野呂分校が設置された。 ③伝統的な産業として川尻筆が製作されている。
13 音戸地区	①倉橋島の北部にあたる。警固屋地区との間の海峡は音戸瀬戸と呼ばれ、平清盛が厳島神社参詣航路の整備のため開削したとされる。 ②音戸瀬戸に面して安芸地乗航路の発達に伴って港町が形成された。木綿受引方が設けられるなど安芸郡南部の経済・交通の要地として繁栄した。 ③近世から近代に形成された町並みが残されており、「音戸の舟唄」や「音戸清盛祭り」などの民俗芸能や風俗慣習が継承されている。
14 倉橋地区	①倉橋島の中部および南部にあたる。火山を中心とする丘陵地帯が沿岸部まで迫り、狭小な平野部に集落が形成されている。鹿島の段々畑など、急傾斜地を利用した耕作地が独特の景観を形成している。 ②古くから海上交通の要衝であり、岩屋古墳や海辺の祭祀遺跡である亀ヶ首遺跡、中世には倉橋多賀谷氏が丸子山城を築き拠点とした。近世においては漁業や造船業を主要産業として栄えた。 ③瀬戸内海国立公園の指定地域であり、渚百選や白砂青松百選に選ばれた桂浜をはじめとする海岸などの美しい自然環境や室尾の町並みなど古くからの町並みが残る。
15 蒲刈地区	①安芸灘とびしま海道によって結ばれた安芸灘諸島のうちの一つ。七国見山を中心とする山稜により海岸線まで急峻な地形が迫り、平坦地が少ない。 ②沖浦遺跡から多量の製塩土器が出土しており、古くから生産活動が行われていた。 ③かまがり古代製塩遺跡復元展示館では、沖浦遺跡の製塩土器に由来する藻塩づくり体験が行われている。
16 安浦地区	①市域の東端に位置し、野呂山の北東側山麓から沿岸部にかけて広がる自然環境に恵まれた地域。山と川で作られた狭小な盆地の中に棚田が形成されている。 ②近世には沿岸部の内海・三津口を中心に新開築調が行われたほか、野呂山頂（勸農坂・立小路）の開拓が行われる。近代には呉鎮守府管内に編成された安浦海兵団が置かれた。 ③近代画家である南薫造の生家とアトリエが、安浦歴史民俗資料館として活用されている。安浦港には、コンクリート輸送船武智丸が防波堤として利用されている。
17 豊浜地区	①安芸灘とびしま海道によって結ばれた安芸灘諸島のうちの一つ。高雄山を中心とする山稜により海岸線まで急峻な地形が迫り、平坦地が少ない。 ②瀬戸内海有数の好漁場に面し、アビ渡来群游海面では伝統漁法であるアビ漁が行われていた。また近代においては「家船」と呼ばれる漁船による県外出漁も行われていた。 ③豊浜のホルトノキ群叢に見られるように、瀬戸内海特有の自然環境とともに古くからの漁村集落の町並みが残されている。
18 豊地区	①安芸灘とびしま海道によって結ばれた安芸灘諸島のうちの一つ。柑橘栽培が盛んであり、急傾斜地を利用した耕作地が独特の景観を形成している。 ②御手洗は沖乗り航路の港として栄え、北前船などの廻船が寄港した。古くから島外に耕作地を求めて出かける「出作」が行われ、島外の畑への行き来や収穫物の運搬には、「農船」という木造船が使われた。 ③御手洗には近世以降の町並みが残されているほか、大長など多くの歴史的建造物が残される地区がある。